

欠けた証拠の在処^{ありか}

- 堇青 「白石、もう一度言うわよ。最後の遺留品^{いりゅうひん}は、赤い光を出すスマートデバイスよ。事件のときにはメインホールの窓の外にあったはず」
- 白石 「それで思い出しました！ ここに来るときにすれ違った二人組の刑事が、『赤い光が……』とか、『窓の外から……』とか喋ってた気がします」
- 堇青 「それを早く言いなさいよ……。その二人は現場検証のために遺留品を持ち出したんでしょう。想定外ね。このタイミングで検証なんて」
- 月長 「現場って、美術館は箱根だよ。今から追いかけても一時間は掛かる」
- 翡翠 「どうするの……？」
- 日長 「いや、問題ねえぜ」

にやりと笑って、日長はスマホを取り出す。

- 日長 「こういうこともあろうかと、同業者に頼んどいた。現場に張り込んどいてくれって。聞いてたな？ ブツは本館の窓の外だ。刑事も近くにいろだろうから、方法は任せる。どうにかしてブツを手に入れてくれ」

しばらくして、ビンゴだったぞ——とスマホから声が返ってくる。

- 同業者 「あんた達の推理通りだ。飛ばしのスマホに登録されたデバイスは2つ。1つは『暗闇』という名称で登録された停電発生装置だが、もう1つの『発光』は見つかっていない。それが3つ目の遺留品だ」
- 同業者 「レーザー光のような指向性^{しこうせい}と収束性^{しゅうそくせい}に優れた光^{すぐ}であれば、空気中ではほとんど見えない。そしてレーザー光がダイヤに照射^{しょうしゃ}されれば、中で光が乱反射し、そこだけ見えるようになる。つまりダイヤだけが光っているように見える訳だな」
- 同業者 「メインホールにはセキュリティゲートがあるから、不審な金属製品^{ふしん}は持ち込めない。つまり、光源はホールの外からダイヤを照らした。該当^{がいとう}するのはホール東の窓の外だけ——という訳で、データを送るぞ」
- 日長 「——よし、送ってもらった証拠のデータをPCにも転送した。あいつにはしばらく現場^はに張ってもらおう。何かわかるかもしれねえしな」
- 堇青 「よろしくお願いします。これで——嘆きのダイヤが光り出した訳がわかった。犯人はスマートデバイスで停電を起こし、嘆きのダイヤを光らせた。でも……問題は、それが何故かってこと。次に考えるべきはそれよ」

▽自分の名前の証拠カードは自分のみ調査可能（調査後の公開は自由）

▽捜査&議論（フェイズ2）を開始する。